

障壁画

桃山時代（1568-1615）の慶長（1596-1615）に狩野派の画家によって作成された、玄関の入り口と寺院内の大書院の部屋を飾る塗装されたの障壁画は、重要文化財に指定されています。作者の正体は定かではありませんが、金色の背景に松の木を印象付ける玄関絵画の大胆な構図は、狩野永徳（1543-1590）の身内の作品であることが連想されます。大書院の第一室（第一の間）の絵画は、中国人を描いた様々なシーンを描いており、第二の部屋（第二の間）は、金の背景に柳、さくら、草花を描いています。着色の特性は、これらがこの期間に狩野光延（1561 または 65 - 1608）が率いる狩野派の画家によって描かれたことを示唆しています。したがって、玄関と大書院の両方の絵画は、狩野派の代表的な作品と見なされます。大書院の浦の間には、桃山時代の末期に、狩野派によって制作されたと思われる他の絵が発見されています。玄関に置かれている間仕切りの絵（衝立）は、中国の子どもたちが遊んでいる様子を描いたものでもあり、桃山時代に狩野派の画家によって制作されたと考えられています。